

園長だより「跳び箱あそび」 第6号

保護者の皆さんの中には「跳び箱」という言葉を聞くと、少し嫌な気持ちになる方はおられません。小学校時代に跳び箱を跳ぶことができずに友だちに笑われた。跳び箱の角にお尻をぶつけて涙が出るほど痛かった。そんなことを思い出してしまう方も少なくないと思います。跳び箱運動や鉄棒運動、マット運動などはできる、できないがはっきりと見えてしまう運動です。これらの運動が克服型の運動と言われる所以です。以前に行われていた間違っただけの体育科学習では「跳べるか跳べないか」だけにスポットが当てられ、担任の先生はクラス全員を跳ばせるために躍起になっていたものです。先生が頑張れば頑張るほど、反比例してうまく飛べない子ども達にとってはその練習が苦痛になり、跳び箱嫌い、さらには体育嫌いが増えていきました。

先日、ある組の子ども達が跳び箱あそびに取り組んでいたもので、私もお手伝いをさせてもらいました。上手に跳べる子もいます。うまく跳べない子もいます。でも、子ども達はみんな一生懸命です。跳べる子はよりかっこよく跳び、安定した着地ができるように。跳べない子も一人一人、自分が気をつけなければいけないことを意識してチャレンジしていきます。「ロイター板を両足で強く踏む」「手を跳び箱の前に着く」「遠くに着地する」等に気をつけてチャレンジしています。

城東ちどり保育園の先生方は子ども達一人一人が跳び箱を開脚跳びで跳び越せるように、励ましながら、そしてほめながら指導しています。もちろん全員が跳べるようにという思いはありますが、それよりもできないことに挑戦している姿やさらにかっこよく跳ぼうとしている姿やお友だちの頑張りを認めている姿に大きな価値を見出しています。そのためには子ども達のやる気スイッチが入るような言葉かけや場の設定がとても大切です。「跳べなくてもいいんだよ。いっぱい失敗をした人が上手くなるよ。だからいっぱい失敗してくださいね。」私は子ども達にこんな言葉かけをしました。

跳び箱を跳べること自体はお子さんが体操選手にでもならない限り、これからの長い人生においてほとんど役に立つことはありません。でも、自分ができないことに何度も何度も挑戦し、どうすればいいのかを考え、粘り強く取り組んだことはお子さんの「生きる力」を育てるための大切な経験になると思います。

時々、昨日まで跳べなかったお子さんが跳び越せるようになったりします。恐怖心に打ち勝ち、初めて跳び箱を飛び越した時のお子さんの顔は達成感に満ちあふれ、素晴らしい輝きを見せます。たかが跳び箱というなかれ。お子さんの価値観に当てはめると跳び箱の開脚跳びは鉄棒あそびの逆上がりとともに相当上位にランクされる技の一つです。皆さんの前で子ども達が跳び箱遊びを披露する機会もあると思います。見事に飛び越したら「すごいね」の大きな拍手をしてあげてください。上手く飛び越せなかったときは「よく頑張ったね」のもっと大きな拍手をお願いします。城東ちどり保育園の子ども達は全員が金メダルをもらえるだけの努力をしました。これは私が保証いたします。